おんぶひもに関する考察

A Study about Piggyback Sling

（2015年３月31日受理）

原　田　眞　澄
Masumi Harada

Key words：おんぶひも，抱っこひも，育児雑誌，保育，子ども

要　　約

おんぶや抱っこは単に搬送の手段としてではなく，子どもを育児するうえで肌と肌がふれあう温もりの伝わる関わり方で，大人と子どもの間に精神的つながりを深める効果に言及する者もいる。しかし，日本に特有の風習とされるおんぶひもを使ったおんぶは年々減少傾向であると感じられる。犬飼[17]は1998年の研究で外出時の子どもの運搬方法におんぶひもを使ったおんぶは全体の6.5％と報告したが，現在はもう少し少ないと推測できる。一方保育所ではおんぶひもを使うことは多く，東日本大震災でも避難時に重宝した。私はこの違いに興味をもち，平成27年２月15日～３月23日の期間に，倉敷市立中央図書館，中国学園図書館の育児雑誌や育児書に関する情報収集と，インターネットやベビー用品売り場でおんぶひもに関する情報収集をおこなった。その結果，親世代に向けた育児雑誌の情報およびベビー用品売り場などにおんぶひもとういう表現は全くなくなっていて，抱っこやベビーカーによる育児が当たり前という印象を受けるものであった。少子化で，一人の親が子どもを抱っこできる余裕ができたことも背景として考えられる。育児雑誌でおんぶ兼用抱っこひもでおんぶをする場面が紹介され，親の立場からのメリットが紹介されていた。近年脳科学の分野でミラーニューロンが発見され，子どもをおんぶして大人のしていることを一緒に見ることが脳に良い刺激を与えることがわかった。今後は，子育て支援や保育学生への教育においてこの最新の情報提供をおこない，TPOに応じておんぶをすることの取り組みにつなげていきたいと考える。

１．研　究　動　機

私たち人間は，生まれてすぐ母親に抱っこされるのを始まりとし，大きくなっていく過程において幾度となく愛情深く抱っこやおんぶをしてもらい育っていく。泣いている子どもでも抱っこやおんぶをされると次第に落ち着き泣きやみ，すやすやと入眠することもできる。抱っこやおんぶは子どもにとっていくつものメリットがあり，大変素晴らしいものだと思う。

東日本大震災の時，保育所から避難するのにおんぶひもが大活躍したという報告もあったが，私も子どもを育てるのにおんぶひもを使っていたので，おんぶひもは日本の育児や保育になくてはならない道具だと考えている。

しかし，最近は乳児保育の授業でおんぶひもを紹介しても，「今まで見たことがない」「知らなかった」と言う学生が見られるようになった。そして，その傾向は年を追うごとに顕著になっている。

そこで，街に出かけて行き交う親子を注意して観察してみたところ，子どもをおんぶしている人を見かける事はできなかった。駅や図書館や商店などに用事があって出かけてくる親子連れは，子どもを抱っこするかもしく

はベビーカーに乗せている。つまり，日常生活において子どもをおんぶしている人に遭遇する機会が稀少となった時代と言える。1998年の犬飼[17]の研究において，外出時に子どもを運搬する手段として子守帯を使ったおんぶは6.5％であったと報告されているが，現在はさらに減少しているように感じられる。18歳～19歳の保育学生が，おんぶひもを見たことも聞いたこともないというのは，決して不思議な反応ではないことに気づかされた。

私が子どもを育てるのにおんぶひもを使っていたのが20年程前までなので，20年間にこれだけ変化するのはやはり大きな驚きである。ところで，保育所では依然として使用されているのに，なぜ家庭の育児で使われなくなったのであろうか。このように，おんぶひもを使っておんぶしないという傾向は単なる流行なのか，おんぶひもを使っておんぶすることに決定的な問題はあるのか疑問に感じた。

そこで，本研究ではおんぶひもに焦点を当てて，古くから日本の育児に用いられてきたおんぶひもについて情報収集し，現代の育児においておんぶひもを使わなくなっている実態について考察したいと思う。

2．研　究　計　画

1）研究期間：平成27年２月15日～３月23日

2）場　　所：倉敷市立中央図書館，中国学園図書館

3）方　　法：育児雑誌や育児書，インターネットから「おんぶひも」に関する記述について情報収集するとともに，おんぶひもとして用いられている道具についても情報収集し，現代の育児においておんぶをしなくなっている実態について考察する。

（用語の定義）おんぶひもとは，おんぶをする行為に用いられるテープ型・立体型の育児用品を意味する。兵児帯・子守帯・おんぶひも・抱っこひも・ベビースリングなどを総称している。

3．研　究　結　果

1）育児雑誌・育児書の記述について

まず，2013年，2014年に発行された育児雑誌Ａのうち８冊について調べたところ，おんぶひもに関連した記事は４ヶ所あった。

①おんぶしながら家事という記事（2013年２月号47ページ）

『首がしっかりしてきたころからおんぶで家事をしながら寝かしつけ。ぐずっているときは庭掃除など動きのある家事。おとなしいときは洗濯物をたたむなど，動きの少ない家事にしています。完全に寝たら布団へ。』

図１　おんぶその１

②外出する際はベビーカーより抱っこが良いという記事（2014年７月号93ページ）

『抱っこは赤ちゃんの顔が見られるし，もし転倒してもママは背中から倒れることが多いので，対面での抱っこが安心』

この文章には，おんぶであれば大人が転倒した時は後ろに倒れるので子どもにとって危険という意味が含まれている。

③父親が我が子をおんぶひもで背負って抹茶を点てている記事（2014年９月号166ページ）

『ママが仕事の日に，僕には習い事の用事が。確認すると子連れでもいいと言ってもらえたので，娘と一緒に茶道教室へ！娘は何をしているのかわかっていないようでしたが，にこにこたのしそうにしてくれました。これからも，育児と習い事の両立を頑張ります！』

図２　おんぶその２

④抱っこひもを使っておんぶしている記事（2014年10月号44ページ）

『〇〇をおんぶしながら調理。私の身じたくが終わる前に〇〇が起きると，なかなかしたくが整わずバタバタに。』

図３　おんぶその３

育児雑誌を概観すると，記事全体に占めるおんぶの割合は抱っこに比べると圧倒的に少なかった。また，ひもを使っておんぶしている記事の中に，そのひもを「おんぶひも」とは呼ばず「抱っこひも」と表現していた。「抱っこひも」という呼び方をしているので，読者である母親や父親に子どもは体の前側で抱っこするものというイメージを発信するものになっていた。

次に育児書を調べてみると，2006年発行のはじめての育児百科[12]では，１ページを上下に分けて同じボリュームで抱っこひもとおんぶひもについて掲載してあった。「おんぶひもは首がすわってから。ママは両手があくので便利です。」などとポジティブなイメージで始まり，大人が２人いておんぶする大人の動作他の大人に補助してもらえる方法と自分１人でおんぶする方法が丁寧に説明されていた。

2014年発行の育児大全科[8]には，おんぶに関する記事は全くなかった。「小回りがきいて，フットワーク軽く動けるのはやはりだっこ。雨の日は傘がさせるし，ベビーカーのようにエレベーターを探したり人混みを避けなくてもOK。」と，子どもを連れて移動する手段として抱っこだけを取り上げていた。わずか７～８年間の間に，おんぶひもという表現が消失していた。

以上は育児雑誌，育児書と呼ばれる母親・父親を対象としたものであるが，保育士など専門職を対象とする専門書に関しては，以下のようであった。

1964年，斎藤[15]は次のように述べている。

『従来わが国では背負うことは当然のことのように行われて来たが，こどものためにはあまり良いことではない。即ち，負い紐で縛られるから，①皮膚の血管が圧迫され，循環作用が障害されて手足が冷える。②胸や胸部が圧迫されて呼吸作用がさまたげられ，充分の深呼吸ができなくなる。③腹部が圧迫されるから，胃の運動が不十分になり，発達を阻害され運動機能の発育が遅れる。④其他長時間背負いつづけると運動不足になり，発育を阻害され運動機能の発育が遅れる。⑤独立の精神の養成にも支障をきたす恐れがある。

以上のような害が多いから背負わないで育てた方がよいが，日本の生活の現状ではこの習慣を全くやめることは不可能のように思われる。（後略）』

それから約20年後の1983年になると，今村[13]が次のように述べている。

『おぶうのは，人手がないときに便利である。おぶうのは一番安全な運搬法である，母親は両手を使うことができる。ベビーカーよりも高い位置なので，道路で車の排気ガスを受けることが少なく，危険に対して即座に避けることができる。

乳児を別室に寝かせて目を離しているよりも，おぶう

方が事故の心配がない。

乳児はおぶわれることを喜ぶ。おぶわれると気持ちよさそうに眠る。おぶうことは母と子の体の触れ合いとなり，母と子の心を結びつける利点があることも指摘されている。母と子の触れ合いは，乳児に対するよりも母親への影響が大きいともいわれる。（中略）おぶうことには長所も短所もあるが，おぶい方を正しくすれば，おぶうことは悪いことではない。（中略）おぶうときは，次の点に気をつける。(1) 改良されたおんぶひもを用い，ももを強く締め付けないこと．（２）またをひろげておぶう。（後略）』

ここではおんぶのメリット・デメリットをあげているが，斎藤とは対照的におんぶを奨励するものであった。その理由として，母と子の心を結びつける利点があることに着目している。それまでの否定的見解，つまり大人の都合によって子どもに身体的な弊害を発生させているという見解から，新たに心と心を結びつける精神的な効果を認めて，デメリットを最小限にするよう配慮してそのメリットをより高めるようとする肯定的見解に変化していた。

さらに約30年後の2014年，迫田ら[1]はおんぶを好む理由を次のように述べている。

『胸と頬を大人の背中につけると温もりを感じ安心する・すぐ近くから声が聞こえる・大人が歩くと心地よく揺れる・おんぶひもでしっかりと固定されるので安定する・手と足が自由に動かせるので安定する・大人と一緒にものを見，話しそして楽しみを共有する一体感がある』

これは，抱っこもおんぶも子どもにとってたくさんメリットがあることを述べている。

２）おんぶひもとして活用されている道具

日本では，平安時代からおんぶひもが使われていたという説があるが，ここでは昭和・平成時代に用いられた道具を整理しておく。

（１）　兵児帯

昔は男性用着物の帯である兵児帯を利用し，子どもの両脇の下とお尻の部分の２か所に帯を巻いて大人の体と密着させるものであった。（図４・５）兵児帯はもともと身に着ける衣類の一つなので，適度な柔らかさと丈夫さと長さがを兼ね備えている。だから，子どもの体にフィットし無理な締め付け感はないかもしれないが，岩田[16]は大人の快適性は他のおんぶひもより乏しいと報告している。インターネット上には，今も兵児帯を使っておんぶをするという情報があり，「着脱も数回程度練習すればすんなりできる」と感想が述べられている。

図４　兵児帯

図５　兵児帯

（２）立体的なおんぶひも

昭和になり，おんぶひもメーカーが立体的に縫い合わしたおんぶひも（図６）を製造した。上のひもを子どもの脇の下に通し下のひもの穴から足を出す形でおんぶし，脇の下に通したひもは大人の上半身の前側でクロスさせてから下側のひもについたリング部分にかけて前側で結ぶ。兵児帯と比較すると，子どもの背中や後ろ頭を支える部分が追加されている。

図６　おんぶひもクロスタイプ
（インターネット　ラッキー工業株式会社 HP より引用）

以前のおんぶひもは図６のようにクロスタイプであったが，現在はこのタイプをあまり見かけなくなった。商品開発をしたメーカーは，その理由を３つ上げている。ひとつには，女性の場合胸の前でおんぶひもをクロスさせることで，胸の膨らみが強調されてしまうことへの羞恥心と抵抗感がある。次に，出産後は母親の乳腺が発達するため，その時期に胸を締め付けると痛みを伴うことがある。さらに，長時間おんぶすると大人の肩や腰にかなりの負担がかかり身体的苦痛を伴うことがある。前の２つの課題については，前でクロスにならないタイプ（図７）が改良されているが，３つ目の課題である肩と腰への負担を軽減することは難しく，子どもが大きくなればなる程深刻な問題となる。

図７　おんぶひもクロスにならないタイプ
（インターネット　ラッキー工業株式会社HPより引用）

現在は，抱っこもおんぶもできる兼用ひもが主流で，抱っこひもとか子守帯などと呼ばれている。また，着脱をしやすくするために部品の改良なども進んでいる。ベビー用品売り場には，日本のメーカー以外に海外からの輸入品が加わり，商品は多種多様で選択肢は広がっている。

（３）　抱っこ兼用ベビーキャリア

2003年ハワイ・マウイ島で誕生したベビーキャリア（図８）は，腰ベルトがしっかりしたタイプのものである。人間工学に基づいた設計で子どもの重みを分散させるため，おんぶによって大人の腰や肩に負担がかからないように作られている。もちろん，子どもにとって足の動きやすさと快適性は，第一に追求されている。シーンによって対面抱き・腰抱きと，１つで３種類の使い方ができるのが特徴といえる。日本では，ここ３～４年の間に注目されるようになっている。

図８　ベビーキャリア
（インターネット　エルゴベビー公式サイトより引用）

（４）ベビースリング

そして，2005年頃からベビースリングと呼ばれる一枚布の抱っこひも（図９）もおんぶに使用できる。

図９　ベビースリング

「ハンモック風抱っこ」と称されることもあるベビースリングは，1981年にイギリスのレイナーガーナー博士がスカーフを結んだ形で子どもを抱っこしたことが始まりと言われている。夫婦で兼用するための工夫として，２つのリングを使い長さを調節するようにした。その後アメリカで商品化されたのち，日本に1980年代後半に紹

介されている。2000年代に入り，海外有名アーティストがこれを愛用していることが紹介され，それを契機にひとつのファッションとして人気が高まったとされる。新生児期から使うことができ，布にくるまれ抱っこされている子どもの姿は母親の胎内にいた時と同じ体勢になることで，かえって子どもは安心するのだと信じられている。主に抱っこをする際に使うものではあるが，一枚布だからこそ多様な使い方が期待でき，大きくなってからはおんぶひもとして使うこともできる。
ベビースリングで子どもをおんぶする場合は，一旦抱っこの体勢をとってから，次に大人の脇を通って背中側に移動させるという手順（図10）をとる。

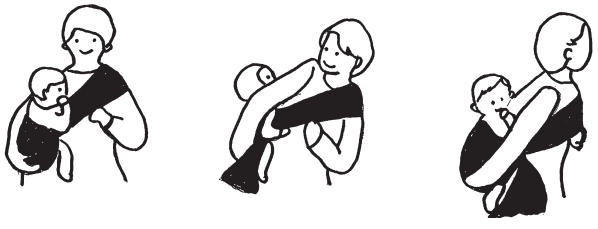

図10　ベビースリングでおんぶする手順

色や柄を自由に選び，自分であるいは注文を受けた人が手作りすることも多いようである。しかし，使用する生地や縫い目の方向によっては破れることがある，部品として使用するリングが破損するなど，ベビースリング自体の問題が発生することがある。また，子どもを支えないで前傾姿勢をとるなど使い方を誤るなど，抱かれている子どもが床や地面に転落したという痛ましい事故が少なからず起きている。また，生後3〜4か月頃までの子どもを抱っこする場合，赤ちゃんの足を無理に伸ばした形にしてしまうと，先天性股関節脱臼になることが明らかとなっている。2007年から，ベビースリング協会がベビースリングのなかで子どもの両足を無理に伸ばさないよう，正しい抱き方を提唱している。

4．考　　察

子どもをひもを使って背負うこと＝おんぶは，日本特有の風習とされ，その歴史は平安時代に端を発すると言われている。

世界では，背中に籠を背負ってその中に子どもを入れて背中合わせにする国や，子どもを大人の腰に乗せて布でくるんで胸の上で結ぶ国があることも知られている。いずれも移動の手段であることは共通するものの，日本のおんぶ程肌を密着するものはなく安定感も欠けるので，おんぶが日本に特有な風習と表現されることに納得がいく。

昔の日本は農業中心で，一家に占める子どもの数は多く５〜６人いるのも珍しくなかった。そのため，大人は育児と家事と仕事を効率よくこなすために，兵児帯やおんぶひもを使い両手が自由に使えるようにしたのであろう。子どもにとって大人の背中は，何よりあたたかく温もりが伝わり安定感もあり安心できるものだと考えられる。

今回，育児雑誌の中から「おんぶ」や「おんぶひも」に関する記事を見つけることはほとんどなかった。逆に「抱っこ」や「抱っこひも」「ベビーカー」に関する記事は，いたるところにあった。

このことは，日本の合計特殊出生率が減少し，一家に占める子どもの数が1〜2人となったこと，働く親が増加したことが背景にあると考えられる。両親にとってその子どもが第一子であれば，その子どもだけに十分関わることができる。そして，両親が共働きというのであれば，子どもは保育所に預けて就労することになり，一日の中で家事と育児を同時にこなさなければならない時間はある程度限定される。

公園や図書館などで見かけた親子連れに，「なぜおんぶではなく抱っこをしているのか」と尋ねたことがある。「外出中は何が起こるかわからない。今は色々怖いことが起こっている。子どもが自分の背中側にいると見ることができない。でも，前側に抱っこしていれば何か異変があってもすぐに気づけるから。」と答えた。また，その抱っこひもをおんぶに使うシーンを尋ねると，「自宅で料理をしようとしたとき，子どもの機嫌が悪くて他にあやしてくれる大人がいない時，どうしてもという時にだけ使う。」と答えた。料理は包丁と火を使うので，子どもを前側で抱っこしたままでは怪我や火傷の心配がある。子どもの安全面を考慮して，おんぶすることをやむを得ず選んでいるというニュアンスであった。

しかし，それはむしろポジティブに捉えるべきなのではないかと考える。それは，ミラーニューロンの存在に

関係している。イタリアのパルマ大学において，サルの脳には相手の行動を映すような神経細胞があることが発見され，その鏡のような神経はミラーニューロンと呼ばれている。これは，自分は何もしなくても相手が何かするのを見ていれば，相手が行動した時に活発化する脳の部分と同じ部分が自分の脳で活発化する脳の仕組みである。のちに，人間にもミラーニューロンが存在することが確認され，たとえば相手が痛みを感じて痛そうな表情をすると自分の脳でも痛みを感じている人の脳と同じ部分が活性化することがおこる。このことから，ミラーニューロンは他者に共感することに役立つものと考えられている。育児雑誌の記事で子どもをおんぶして父親が抹茶を点てる，母親が家事をするなどがあったが，料理をする,家庭菜園をすることなどすべてが,子どもにとって意義深い刺激のチャンスと捉えなおすことができる。このことから，公園や図書館に出かけた時におんぶできる状況にあれば，ケースバイケースでおんぶすることを取り入れたらよいのだと思われる。その時は，子どもが大人の肩越しに様々な事象を見られるよう目の位置に配慮しておんぶする必要がある。

育児雑誌や育児百科でおんぶを取り上げることは稀であったのに対し，保育士養成の専門書では抱っことおんぶは必ず取り上げられていた。その中で，1964年に斎藤は医学的見地からおんぶされる子どもに身体的なデメリットが多いことをとらえ，子どもをおんぶするのはできるだけ控えるようにと否定的な見解を示していた。しかし，その約20年後の1983年に今村は育児という側面からおんぶのメリットを明らかにしたうえで，医学的側面のデメリットを最小限にするおんぶを推奨している。具体的には，改良されたおんぶひもを用いて大腿部を強く締めつけないこと，股を広げておんぶすることなどであった。大腿部を強く締めつけないのは血液循環を確保する目的で，股を広げておんぶするのは先天性股関節脱臼を予防する目的ではないかと考える。巻おむつや両足を揃えた状態になる洋服やおくるみなどをやめるよう啓蒙活動を展開したことにより，先天性股関節脱臼の発生率は1/30～1/50に減少した。何事にも，エビデンスに基づいた道具や手技の改良は必要であることを痛感する。

今，ベビー用品売り場に行くと，多種多様なおんぶひも･抱っこひもが並んでいて，選択の幅は広がっている。しかし，安全面への配慮として，SGマークがついているかどうかを必ず確認すべきだと考える。

今回の調査により，育児雑誌，育児百科，育児書において，おんぶすることを控えなければならないという明確な理由は見つけられなかった。逆に，大人の行動をほぼ同じ位置，同じ方向から見られるというミラーニューロンについて確認できたので，子どもにとってのメリットを第一に考えるとおんぶすることは良いことだと思われる。現実的には，他の先進国と同じように移動の手段として捉えるだけなら，抱っこかベビーカーということになるが，先述の先天性股関節脱臼の予防活動と同様保護者への知識の普及も取り入れたらよいと考える。私は保育士養成に携わるものとして，学生への教育においても取り入れたいと思うし，子育て支援活動などにおいても親御さんに伝えていきたいと思う。

最後に，おんぶによる大人の肩と腰にかかる負担について考えたい。外池ら[11]は，おんぶひもを用いたおんぶと抱っこひもを用いた抱っこについて，大人にかかる筋負担を比較している。その結果によると，腰痛に関係する脊柱起立筋への負担が大きいのは抱っこ，肩こりに関係する僧帽筋への負担が大きいのはおんぶである。高額なベビーキャリアの中には，子どもの体重を分散し大人の負担を最小限にできるものが開発されている。しかし，経済的な理由からすれば，手軽に購入できるものではない。大人の体調や場面に応じた使い分けが，鍵になるように思われる。

現代の育児においておんぶひもを使ったおんぶが次第に減少傾向にはあるものの，してはいけないことではなく，むしろ適切な配慮のもとに取り入れたいことであることがわかった。ただ，おんぶひもを使ったおんぶが日本特有の風習と言っても，若い親世代が使いやすさや快適さを実感できない以上，今後も減少傾向は続くのではないかと考えられる。

そのなかで，ミラーニューロンに関する発見は保護者に広く知ってほしい情報だと感じるものである。インターネットが発達した現代社会では，自分が欲しい情報はいくらでも入手できるが，求められなければ広く浸透しかない傾向も起こりうる。

今後は，現在子育て中の親世代がおんぶに対してどのような意識をもっているのか，おんぶをする場面など実

態を明らかにしていきたいと考える。

引用・参考文献

１）社会福祉法人あすみ福祉会茶々保育園グループ編：新訂見る・考える・創りだす乳児保育．萌文書林（2014）pp137
２）ひよこクラブNo232.ベネッセ（2013）p47
３）ひよこクラブNo249.ベネッセ（2014）p93
４）ひよこクラブNo251.ベネッセ（2014）p166
５）ひよこクラブNo252.ベネッセ（2014）p44
６）ふじわらよしこ：赤ちゃんとママのハッピースタイル！スリングで抱っこ。．雄鶏社（2007）
７）田中梨香監修：ベビーグッズ使うとわかる本当にいいもの．東京書籍（2011）
８）安田修一編集：育児大全科．主婦の友社（2014）
９）石田勝正:抱かれる子どもはよい子に育つ確かな「存在感」をはぐくむ愛の心理学．PHP研究所（1993）
10)中島澄枝:おんぶが知育にいい３つのポイント　ラッキー工業株式会社　http://www.lucky-baby.co.jp/products/
11）外池遼，中島求：幼児の抱っこ・おんぶにおける筋負担のシュミレーション解析．日本機械学会2010次大会論文集（５）．pp43-44
12）駒由美子編集:新版はじめての育児百科．主婦の友社（2006）pp69
13）今村榮一：現代育児学．医歯薬出版（1979）pp132
14）斎藤文雄監修:改訂育児学概要．高陵社書店（1964）pp147-148
15）主婦と生活社編：赤ちゃんブックス育て方．主婦と生活社（1966）　pp151
16）岩田浩子：日本式おんぶの研究―おんぶの姿勢と乳児運搬用具の着用感について―．名古屋女子大学紀要42（1996）pp1-9
17）犬飼博子：子どもの「運搬」に関する身体的負担．日本家政学会誌Vol.49 No.11（1998）pp1233-1239